

## JACTFL 第 9 回シンポジウム「外国語教育の未来(あす)を拓く」 総括コメント:世界とつながる複数外国語教育の展望

臼山 利信 USUYAMA Toshinobu<sup>1</sup>

令和 2(2020)年を迎えた直後から、突如とし新型コロナウイルス COVID-19 が出現し、その後、日本を含む世界中をパンデミックの渦に巻き込みました。このコロナ禍によって、令和 2 年 3 月 8 日に予定していた JACTFL 第 8 回シンポジウム「複数外国語教育の基盤を創る」は、やむを得ず中止となりました。そして、1 年後、新型コロナウイルス感染拡大の収束が見えない中、オンサイトからオンラインへと活動の場を移し、JACTFL 第 9 回シンポジウムを開催し、成功裡に終了することができました。

本シンポジウム開催に至る間、山崎吉朗 JACTFL 理事長の発案とリーダーシップの下、コロナ禍で奮闘する全国の初等・中等・高等教育の現場の先生方を励まし、国内外の先生方がコロナ禍で取り組んだ教育活動の工夫などを共有するために、以下のように、計 3 回の JACTFL オンラインシンポジウムを開催しました。

第 1 回 JACTFL オンラインシンポジウム「コロナに負けない多言語教育」 2020.7.5

第 2 回 JACTFL オンラインシンポジウム「コロナをプラスに転じる多言語教育」 2020.9.5

第 3 回 JACTFL オンラインシンポジウム「コロナから立ち上がる多言語教育」 2020.12.20

各回とも予想を上回る参加人数(第 1 回-200 名、第 2 回-200 名、第 3 回-160 名)で、山崎理事長の「コロナには絶対に負けない」「外国語教育の希望の灯火を消さない」という強い思いが、現場の多くの先生方に届いたのではないかと思います。

JACTFL 第 9 回シンポジウムは、上記のオンラインシンポジウムでの活動を基盤として、企画・組織されました。オンラインによって外国語教育の形態が加速度的に多様化し、発展・進化しつつあります。複数外国語教育の基盤創りが日本国内でも進む中で、日常の外国語教育が世界の人々とのつながりを体感しながら行われる時代が到来しつつあります。まさに、その視点を外国語教育関係者が共有し、議論を深めていく契機とすることが、今回のシンポジウムの大きなねらいの 1 つになっています。

小野賢志氏(文部科学省初等中等教育局 外国語教育推進室長)は、まず初等・中等教育段階の新学習指導要領(小学校-2020 年度全面実施、中学校-2021 年度全面実施、高等学校-2022 年度年次進行で実施)を貫く理念的な側面から外国語教育の目指すべきあり方について説明されました。具体的には、1.「どの

<sup>1</sup> 所属:筑波大学 University of Tsukuba

ような社会を創りたいか」「どのように生きたいか」という目的自体を考えること、2.多種多様な文脈の中で目的に応じて情報を理解し、自分の考えを整理すること、3.「正解」のない問題に対して、立場の異なる様々な人々と協働して「納得解」を得ること、という3つの側面を紹介されました。これは外国語科目を含む全ての教科・科目の根底に流れる理念になります。その意味で、「主体的に外国語を学び、その学びが自身の人生にどのような意味があるのかを考えることのできる児童・生徒を育成するということが、新学習指導要領の外国語科目が目指す方向性である」(小野室長)ということになります。次に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(平成28年12月21日中央教育審議会)等に基づいて、外国語学習の目標(文化理解、主体的な学習者の育成等)、国語教育と外国語教育の連携(言語間の共通点と相違点の気づき等)、英語以外の外国語教育の意義(文化の多様性の尊重等)について言及されました。さらに、多様な外国語教育への期待として、これまでの文科省の外国語教育支援の取り組み(JETプログラム、ICTを活用した外国語教育の事例共有など)を紹介し、多様な外国語教育の方向性として、(1)「どのような資質・能力(competencies)を育てるのか」という目標<sup>2</sup>、(2)他教科・科目等との有機的な関連づけ<sup>3</sup>、(3)国内外の学校、関係機関との交流・連携<sup>4</sup>が重要になることを指摘されました。

「外国語学習と多元的世界」というテーマで基調講演をされた施光恒先生(九州大学教授)は、「グローバル化」「英語化」を進める前提、すなわち、①グローバル化、英語化が進めば日本経済は復活し豊かになる、世界も豊かになる、②多様な人々が英語で交流できるようになれば、創造性も高まる、③そもそも「グローバル化」「英語化」は時代の流れ(趨勢)であり、一種の宿命である、といった3つの前提的言説に疑問を投げかけ、西洋近代社会の成立過程や日本の近代化過程という歴史における言語状況などの分析・考察から、(日本及び日本以外の)社会が「グローバル化」「英語化」に向かう一元的世界ではなく、各国・各地域の多数の文化・言語・伝統の基礎の上に近代化を進めた多元的世界を目指すのが望ましいという考えを示されました。ご講演の中では、①の言説については、宿命論的・歴史法則主義的な見方である国民国家やナショナリティの終焉という議論<sup>5</sup>は非常に一面的で単線的な見方であり発

<sup>2</sup> 「実用か教養か」という二項対立を離れ、学校全体の教育目標とのつながりを明確にすること。

<sup>3</sup> 国語や英語、総合的な探求の時間、地理歴史、道徳、特別活動等の学習と結びつけ、本当に伝えたいこと、理解したいことを伝え合うこと。

<sup>4</sup> 目的のある実際のコミュニケーションを生み出すこと。

<sup>5</sup> a) グローバル化: 村落共同体 → 国民国家 → 地域統合体(EU など) → 普遍的で単一の世界秩序・枠組み(グローバル市場、グローバル統治)

想であること、西洋の「近代社会」の成立期に大きな役割を果たしたのは「普遍」(ラテン語)の知の「翻訳」「土着化」(各地域の土着語訳、現地語訳)にあることについて言及されました。②の言説については、西欧の宗教改革による俗語化と、経済成長や人々の創造性の開発との相関性を主張している Binzel 教授らの実証的な研究成果<sup>6</sup>や「翻訳」と「土着化」によって近代的な国づくりを成功させた明治時代の日本の事例に基づいて、現在の「グローバル化」が宗教改革以前の「中世化」に逆行する、社会構造が中世的な構造(グローバルエリートの特権階級化、グローバルエリートと非グローバルエリートの階層化・分断化、英語と日本語の階層化)に逆戻りしてしまう恐れがあり、創造性を十分に発揮できなくなる可能性があること<sup>7</sup>などを指摘されました。具体的な懸念として、(1)「グローバル化」が国籍を意識せず、普遍語(英語)を用いる「グローバル・エリート」を生むこと、(2)庶民の政治参加が事実上制限されること<sup>8</sup>、(3)非英語国民は自国の言語や文化への自信をはく脱されること<sup>9</sup>、(4)庶民の知的世界が縮小すること<sup>10</sup>などを挙げられました。③の言説については、「グローバル化」「英語化」は時代の流れ(趨勢)と見なすのは危険で、「土着から普遍へ」ではなく、「普遍から複数の土着へ」という時代の流れが「近代化」の道筋として望ましいという主張をされました。すなわち、「普遍」と意識されることの多い外来の先進の知を、「翻訳」を通じて土着に位置づけ、土着の文脈を豊かにし、各社会の庶民が参加しやすい空間をつくっていく過程こそが、「近代化」であり、「進歩」だと見るべきだと語られました。ご講演の最後に、日本を含む世界に求められるのは、「グローバル化」でも「孤立主義」でもない、「国際化」を目指す世界である、すなわち、各々の文化や伝統を基盤とした様々な国々・地域からなる多元的世界であると述べられ、それ故にそこで求められる言語・文化教育は、英語一辺倒ではなく、異なる国々・地域やその文化の積極的相互学習であり、母語を重視した複数言語教育であると結ばれました。施教授の数々のご指摘には、「グローバル化」「英語化」の名の下で、豊かな日本語の

---

b) 英語化:各地の方言 → 国語 → 世界共通語(事実上、英語)

以上、ご講演内容に基づく。

<sup>6</sup> Binzel, C., Link, A. and Ramachandran, R., “Vernacularization and Linguistic Democratization”, *CEPR Discussion Paper 15454*, 2020.

<sup>7</sup> 施教授は、創造性を発揮する上で、違和感とひらめきが重要な要素であり、それらの言語化には母語の存在が欠かせないことを指摘した。

<sup>8</sup> 施教授は、例えば、各国の一般国民の声(民主主義)よりも、グローバルな投資家や企業の評価を気にする政治、経済的な力が政治権力に容易に変換されてしまう現代の米国などの政治を挙げている。

<sup>9</sup> 施教授は、「英語以外の言語は「国語」ではなく「現地語」になってしまう」という懸念を示した。

<sup>10</sup> 施教授は、一例として、日本における専門書・学術書の翻訳文化が衰退する可能性が高いことについて言及した。

世界を、地球上の豊かな個別言語の世界を失ってはならない、これからの外国語教育が母語としての日本語や日本文化、各国語と各国文化、各地域語と各地域文化への誇りや自信を失わせるようなものであってはならないというメッセージが込められていると感じました。

特別企画「コロナに負けない高校生の若き取り組み」では、コロナ禍にあつて、英語以外の外国語学習に意欲的に取り組んだ、東京都立北園高等学校(ドイツ語)、関東国際高等学校(韓国語とインドネシア語)、北海道札幌国際情報高等学校(ロシア語)、カリタス女子中学高等学校(フランス語)の4校の代表(生徒・教員)による青春の記録が紹介されました。個人の外国語学習ポートフォリオとしての内容からクラスにおける普通の授業の取り組み、海外の姉妹校との国際交流の取り組みに至るまで多様な内容でしたが、それぞれの試行錯誤の歩み、ひたむきな努力、そして各言語と真剣に向き合った結果としての学習成果が見事に表現されていました。今回発表した、あるいは紹介された4校の生徒たち全員と指導された先生方に対して、心から称賛とエールを贈りたいと思います。

研究発表「世界とつながる複数外国語教育の展望を実現する多様な実践報告」の分科会1(オンライン授業の実践について)では、計5件の大学での活動事例報告が行われました。ハイフレックス型(Hybrid-Flexible:HyFlex)の実践(アイヌ文化)、母語話者のライブ参加を伴う語学研修の実践(スペイン語)、ビデオコミュニケーションサービス Flipgrid を活用した非同時双方向型の国際交流の実践(ロシア語)、夏休みを利用した Zoom 等を活用した同時双方向型の国際交流の実践(フランス語)など、いずれも工夫を凝らした取り組みで、グッドプラクティスとして外国語関係教員の参考になる、汎用性の高い事例だと思われます。

分科会2(多言語・複言語教育について)でも、計5件の研究報告・活動事例報告がなされました。英語以外の外国語教育を経験した高校生・大学生の意識や内面の通時的変化に関する調査研究と、日本の高等学校における英語以外の外国語教育(手話、方言等を含む)の地域差に関する調査研究の2件は、新たな知見と優れた独自性を有しており、研究論文としての完成が期待されます。特に後者は卒業論文の域を超えた、特筆に値する優れた研究成果だと思えます。また、学校設定科目「スペイン語」の立ち上げ過程の報告は、管理職の理解と協力、制度と手続きの実務上の情報、学内外の環境づくりのノウハウなど、学校設定科目として英語以外の外国語科目を開講するための方法を余すところなく詳らかに説明しています。全国の高等学校で、将来的に英語以外の外国語教育の導入を考えている教員にとって

極めて有益な情報で、社会的意義の大きな報告だと考えます。高大協働プロジェクトの取り組みについての報告は、文科省の新学習指導要領の理念と理論に裏付けられた精緻な教育活動実践と分析・考察が積み上げられた内容で、特に年間目標と単元目標の有機的関連、単元目標と各自の授業(活動)の有機的関連まで突き詰めて設計・考案され、継続的に改訂されている「単元指導案様式」は、プロジェクト研究の卓越した研究成果の1つだと思われます。大学での「多言語活動」授業の報告は、大学と一般財団法人との協働による成果という点でユニークな取り組みです。法人の持つ多言語実践活動の独自のノウハウなどを活かした学習の効果と学生たちの外国語学習への苦手意識克服への手応えのようなものが伝わりました。

コロナ禍は、私たちの生活と行動様式を一変させました。学校や大学等における外国語教育の現場も適宜オンライン(同時双方向型、オンデマンド型)、オンサイト、ハイフレックスなどの形態に変わりました。興味深いことに「新しい生活様式」という困難を強いられることによって、私たちの、オンラインによるコミュニケーション手段と機会がコロナ以前と比べてむしろ格段に広がった感があります。**オンライン教育の利点は、物理的な距離・場所・時間から解放されている点**です。そのお蔭で、例えば、大学という枠組みにおいては、学内では学部・学科横断型、ゼミ横断型の授業交流などが可能になりました(**オンライン学内連携教育**)。国内の大学間の連携講座、大学間ゼミ交流なども可能です(**オンライン国内連携教育**)。国内の大学と国外の大学を繋いだ共同主宰による連携講座等の企画・組織・運営も推進できます。国際的なダブル・ディグリープログラム創設のハードルも低くなるでしょう(**オンライン国際連携教育**)。障がい学生の教育に効果のあるオンライン教育の研究開発も今後進んでいくと思われます(**オンラインインクルーシブ教育**)。社会人対象のオンライン教育の整備・拡充も見込まれます(**オンラインリカレント教育**)。

このようにオンライン形態での多様な教育活動は、外国語科目を含む数多くの授業科目で実現可能なものになりました。その意味で、言語(外国語)を学ぶ児童・生徒・学生・社会人たちがオンラインでつながる「世界」というのは、「多元的」で国内外に無数に広がっているということになります。後は、**テクノロジーの恩恵を受けながら、自在にアイデアを出し、協働する「世界」にアクセスし、オンラインで可能な教授法を用いて必要な複数言語(外国語)教育を展開するだけです。**最後に、本シンポジウムを契機として、たとえコロナ禍にあっても逞しく前向きに、それぞれが自らの創意工夫でオンライン形態を巧みに活用して、世界とつながる複数外国語教育をデザインし、創っていくことを願ってやみません。